源氏物語今かがみ

文學博士 吉澤義則 著

源氏物語今かがみ

文學博士　吉澤義則著

著者略歷

名古屋市の人
明治九年生
京都帝國大學名譽教授

〔主なる著作〕

對校源氏物語新釋
日本書道新講
國語國文の研究
未刊國文古註釋大系全十八册

昭和廿一年七月廿日　初版印刷
昭和廿一年八月一日　初版發行

版權所有

源氏物語今かがみ

定價　金七拾円

著者　京都市左京區修學院西沮澤　吉澤義則

企畫編輯者　大阪市南區安堂寺橋通三　出來島雅夫

發行者　大阪市南區安堂寺橋通三　大淵善吉

印刷者　京都市下京區西洞院通七條　內外印刷株式會社　代表者　富森茂彭

發行所　大阪市南區安堂寺橋通三　新日本圖書株式會社

配給元　東京都神田區淡路町二丁目　日本出版配給株式會社

（乱丁落丁のものは取替へします）

源氏物語今かゞみ

目次

序歌……一
緒言……二
源氏物語系圖……七
源氏物語年立……一三
第一章　源氏物語所産の時世裝　附　大和魂の眞相……二五
第二章　紫式部の傳記……四八
第三章　源氏物語の大筋……五九
第四章　源氏物語の物語論……七三
第五章　雨夜の品定めに見られる婦人觀　附常夏卷の一節……九二

第六章　源氏物語の理想人物……一五四
第七章　源氏物語の文章　其一……一八一
第八章　源氏物語の文章　其二……二〇七
第九章　源氏物語傳本の種類並註釋書……二三八
第十章　結　語……二四七
附　錄
平安時代に於ける、なまめかし・みやび・えん・すき・風流……二六七

……終……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序歌

源氏物語の讀みゆがめられたること年久し。おほけなくも、そを正さんの願ひありて、をぢなき手に、今かゞみみがき始めんとしての朝詠める。

二つなき　國の寶ぞ　今かゞ見
これの物語　まほに寫せこそ

昭和廿年秋立つ比

義　則

「源氏物語今かゞみ」

緒　言

一　大和魂といふ言葉は、我が國に於て、最も平和を愛好した平安時代に生れ、日本精神卽ち日本人の心といふ意味に用ひられた。この意味の大和魂は、日本國の存在し、日本國民の存在する間は存在する精神である。それが江戸末期より、一部の人士に、武士道精神といふ意味に用ひられるやうになり、大平洋戰爭時代に、軍國主義といふ意味に解されるやうになつた。何れも甚しく歪曲された、さうして國民を過らせた咒ふべき誤用である。その爲、さしも流行した大和魂といふ言葉も、終戰と共に頓に影を潛め、それを口にするも恐ろしいもののやうに思はしめるに至つた。曩に云つたやうに、日本民族の存續する限り、大和魂は存續すべき指導精神であづて、從つて、大和魂といふ言葉も、當然國民の口に上らなければならない筈である。固より、戰爭の勝敗によつて、消長すべき性質のものでは無い。

さる臨時議會に於ても、日本精神は軍國主義では無いと云つた言葉が、屢用ひられたのを聞い

た。けれども、どうして軍國主義で無いかを說明した人のあつたのを聞かないのである。爲政者達は、指導者達は、なぜこの然る所以を說いて、世界人に、內地人に、廣く納得の行くやうに努力しないのであらうか。

日本文化事象を說かうとすれば、必ず、大和魂を說かなければならない。大和魂といふ言葉を封ずるのは、日本文化事象の、史的考察並に將來の見通しを封ずる所以である。大和魂は、日本國民の指導精神であるからである。日本文化史は、その指導によつて展開したものであり、又展開すべきものであるからである。

大和魂が武士道精神の同義語で無いことは、昭和十四年頃から、放送に於て、著書(「大和魂と萬葉歌人」)に於て、說いたつもりであるが、時勢の壓迫で十分その意を盡すことの出來ない憾みがあつた。本書が、その第一章に、大和魂を說いてこの性格を明かにし、兼ねてその軍國主義精神でも、武士道精神でも無い理由に、說き及んだ所以は、大和魂の本義を、廣く內外に了解してもらひたく、又、依つて以て、日本國民の本當の姿を見て貰ひたく、又古典の眞意義を理解して貰ひたいからである。

一　源氏物語を誨淫の書と見る說が、殆ど、今日の常識のやうになつてゐる。これは、源氏物語を

讀む力も無い學者達の誤傳を信じて、源氏物語をのぞき見した教育家や爲政家が、輕率にも、決定してしまつたものであつて、根も葉もない浮說である。いふまでも無く、源氏物語は戀物語の形で表現されてゐる。殊に、光源氏を主人公とする前編四十一卷は、墮落した「すき」の物語である。「すき」によつて、しかも、墮落した「すき」によつて、婦人の種々相を點出し、婦人の「ありかた」を示唆しようとしたものである。「すき」の中でも、墮落した「すき」を選んだのは、それで無ければ、婦人に誨ふべき種々相を例示することが出來なかつたからである。「すき」は、實は戀では無くて、異性の交際の中に醸し出される雰圍氣を樂しむ遊戯である。私はこれを今日の「男女交際」と同義に解くべきものと、信ずるのである。源氏物語の後篇卽ち所謂宇治十帖は、戀物語であるけれども、前編は「すき物語」と云つた方が適切である。今源氏物語を戀物語と呼んだのは、前後篇を統べて云ふに適當な名稱が見つからなかつたが爲である。

一　源氏物語は、「戀」や「すき」の紊れが、教誨の方便として寫されてある。その方便であることを讀みわけることの出來ない人達が、源氏物語を、誨淫の書と呼び、また、これを資料として、平安時代を淫靡の代名詞の如く妄斷してゐるのである。源氏物語にとつても、平安時代にとつても、迷惑至極な話である。夙く、九條植通は、かうした誤解をおそれて、源氏物語の讀

み方に就て、注意を與へてゐるのである。詳細は第四章「源氏物語の物語論」を通讀してもらひたい。

一　問題は、便宜に從つて、諸章に分けて說いてゐるのがある。それ〳〵その旨を注意しては置いたつもりであるけれども、彼此見合はして、十分に讀みとつて貰ひたい。

一　書き終つて讀みかへして見ると、文章の拙さとそゝつかしさとの爲、思ふところが、云ひつくされてゐないやうなのが、數々ある。勝手な云ひ方ではあるけれども、私の意圖するものを捉へて、推讀して頂きたいのである。

一　本書說くところは、全篇に亘つて、明治以後の源氏物語觀とは、甚しく相違してゐるであらう。けれども、ことさら、異を樹てようとしたわけでは無い。式部の物語論に沿うて見て行かうとすると、さう讀まざるを得ないと信ずるところを、述べたまでの陋見に過ぎない。本居宣長翁は、源氏物語を讀まうとすれば、その物語論を了解してゐなければならないと說いて、「玉の小櫛」を起稿するに當つて、先づ、瑩卷なる物語論を解釋してゐられる。私は、この本居翁の所見に、絕對に服從するものであることを、こゝに、申添へておきたい。

一　源氏物語の後の文學其の他に與へた影響に就て一言すべきであつた。文學以外の藝術に對す

る影響に就てはともかくも、江戸文學、特に西鶴文學に與へた影響の如きは、必ず言及しなければならなかつたやうに思はれるけれども、再版の機もあつたならばと、此の度は都合上、省略することにした。

昭和二十一年正月

吉澤義則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

源氏物語系圖

(一)

- 桐壺帝（桐壺）（榊）で崩御。（花宴）在位
  - 前坊
    - 秋好中宮 冷泉宮院の中宮、母六條御息所、（葵）で齋宮（繪合）で女御（乙女）で中宮。
    - 桃園式部卿宮（薄雲）で卒去。
    - 朝顏齋院（榊）で齋院（朝顏）で齋院をやめる（若菜下）で薙髮。
  - 攝政北方致仕大臣、葵上等の母、大宮と見ゆ。（藤裏葉）で卒去。
  - 女五宮
  - 朱雀院 母二條太政大臣女弘徽殿大后、（桐壺）で東宮（葵）には既に受禪（澪標）で位を冷泉院にゆづる（若菜上）で入道し給ふ。
    - 六條院 母桐壺更衣、（桐壺）で生る。源姓を賜ふ。光君と稱せらる。
    - 螢兵部卿宮
    - 帥宮
    - 冷泉院 母藤雲女院、（紅葉賀）で生誕、（澪標）で卽位（若菜下）で讓位。
      - 皇子
      - 女一宮
      - 女二宮
    - 宇治宮
      - 大君（總角）で卒去。薫が思を運べる人。
      - 中君（總角）で匂宮妃。

—浮舟宇治十帖の女主人公、母常陸前司の北の方、(東屋)で薫にあひ(浮舟)で匂宮にあひ煩悶の極投身(手習)で剃髪。

六の君母惟光の女、(寄生)で匂宮の配となる。

—夕霧母葵上、(葵)で生れ(乙女)で元服。

—薫母女三宮、(柏木)で生れる、宇治十帖の主人公。

—明石中宮母明石入道の女、(澪標)で生れる。(薄雲)で紫上に養はれる。(藤裏葉)で東宮妃。(御法)で中宮。

—今上(澪標)で東宮(若菜下)で即位。

—女一宮(若菜下)で齋宮。

—落葉宮(若菜下)で柏木の北の方(夕霧)で夕霧と婚す。

—女三宮(若菜上)で源氏の北の方。(柏木)で薫を生み、落飾。

東宮母明石中宮、(若菜上)で生誕(若菜下)で立坊

—匂宮母同、(若菜下)で生る(匂宮)で兵部卿。

—女一宮薫がひそかに思をかけてゐたこと(蜻蛉)に見える。

—女二宮(寄生)で薫の北の方。

(二)

先帝

—式部卿宮(桐壺)では兵部卿(乙女)では式部卿。

—薄雲女院(桐壺)で入内(紅葉賀)で冷泉院を生み、中宮(榊)で落飾(薄雲)で崩御。

—源氏宮朱雀院の妃、女三宮の母

髭黒右大將の北方(眞木柱)で離別。

—冷泉院女御(乙女)で入内(若紫)で源氏に養はる(葵)で源氏と婚す。(若菜下)で五戒をうけ、(御法)で卒去。

—紫上

(三)

常陸宮——末摘宮(末摘花)ではじめて源氏にあひ後東院に住む。

(四)

攝政太政大臣（桐壺）で左大臣。源氏元服の時加冠の役をする。

澪標で太政大臣となり攝政す（薄雲）で卒去。

致仕太政大臣（桐壺）で藏人少將（帚木）で頭中將（葵）で三位中將（須磨）で宰相中將（澪標）で權中納言（薄雲）で權大納言右大將を兼ねる（乙女）で內大臣（藤裏葉）で太政大臣（若菜下）で致仕（幻）—（匂宮）の數年の間に卒去。

葵上（桐壺）で源氏と婚し、（葵）で（夕霧）を生んで卒去。

柏木權大納言（乙女）で左少將、累進して（若菜上）で右衞門督（同下）で中納言を兼ね（柏木）で權大納言に任ぜられて卒去。

紅梅右大臣（初音）で辨少將（若菜上）で頭辨（紅梅）で按察使大納言（竹河）で右大臣左大將。

弘徽殿女御（澪標）で入內。冷泉院の女御。

雲井の雁夕霧の北の方

瑠璃君 玉鬘の君ともいふ、母夕顏、九州に人となる、（玉鬘）で上京、源氏に養はれ（眞木柱）で髭黑大將の妻。

近江君

(五)

二條太政大臣始め右大臣と見え、（樹）で太政大臣、（明石）で卒去。

大納言 —— 頭辨

弘徽殿大后 桐壺帝の女御、朱雀院の御生母、（榊）で皇太后。（若菜上）で崩御。 —— 麗景殿女御朱雀院の女御。

四の君致仕太政大臣の北の方

朧月夜尚待（花宴）で源氏にあふ（葵）で朱雀院の後宮に入り、御匣殿といふ（榊）で尚侍（若菜下）で落飾

（六）

右大臣今上の外祖父、（明石）で右大臣と見える。――髭黒右大臣（胡蝶）で右大將（若菜下）で右大臣――

眞木柱上（若菜下）で螢兵部卿宮の北の方となつたが、宮の薨後紅梅大臣の北の方となる。

冷泉院女御母は瑠璃君（竹河）で入内。

内侍のかみ

（七）

大臣――明石入道（初め中將、後播磨守となり、任滿ちて明石に閑居す、孫明石中宮が皇子を擧げたことをきいて山に入る。）――明石上（源氏の夫人、（松風）で上京して嵯峨に居り、後六條院に遷る。）

按察大納言――桐壺更衣桐壺帝の更衣、源氏の生母。

（八）

大臣――宇治八宮北方二人の女王を生んで早世したこと（橋姫）に見える。

父――常陸前司の妻（浮舟の生母、後常陸守の妻となる。）

左中辨――辨尼宇治宮に仕へて（橋姫）で薫に祕密をうち明ける。

（九）

大臣――六條御息所前坊の妃、秋好中宮の母、前坊の死後源氏と契つた。（澪標）で剃髮ついで卒去。

(十)

―藤原惟光源氏につかへて終始まめやか なりし人、(梅枝)で參議。―兵衛佐(乙女)で童殿上。(梅枝)で兵衛佐。

―山の阿闍梨

―典侍夕霧の愛人、匂宮の妃となつた。六の君たちの母。

源氏物語年立

源氏の齢	巻名と記事	人々の年齢
一	桐壺 源氏生る。	
二		
三	桐壺更衣卒去。	
四	一の宮立坊。	
五		
六	源氏外祖母（桐壺更衣母）卒去。	
七	源氏讀書始。	
八	壺 高麗人觀相の事、源氏賜姓の事、藤壺女御（先帝女四宮。後に薄雪女院ともいふ）入内の事などこの數年の間にある。	
九		
十		

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.